

社会科教育と地域・地名

—— 「奥羽」と「東北」の歴史的変遷を例に ——

米 地 文 夫*・細 井 計*・藤 原 隆 男*
今 泉 芳 邦*・菅 野 文 夫*
(1994年12月8日受理)

Fumio YONECHI, Kazuyu HOSOI, Takao FUJIWARA,
Yoshikuni IMAIZUMI and Fumio KANNO

Areas / Place Names in Education of Social Studies:
An Example of the Historical Transition of "Oh-u" and "Tohoku"

I はじめに

社会科教育において、地名は主に地理的分野で扱うものと見なされてきた。しかしながら、筆者らは地名を社会科の他の領域においても重視すべきものと考え、その一端を公けに(今泉・米地1994など)してきた。社会科教育で地名を扱うことの多い分野としては、地理的分野について歴史的な分野があげられる。

歴史的な分野における地名の取り扱いにおいて注意すべきことは、地名が歴史的に変化するものである点であろう。江戸から東京への変化は、単に別な地名になったということではなく、その変化そのものが歴史的に意味のあるものであることは、いうまでもない。したがって、地名を歴史的な分野で扱うことは、地名を単なる歴史的な事象の生じた土地空間を示す記号として用いるばかりではなく、地名の変化変遷そのものを歴史学習の重要な対象として扱うことが必要である。その場合、江戸から東京、蝦夷地から北海道、というような明確なもの問題は少ないが、琉球と沖縄の場合など、多くは、より微妙な、しかしながら重要な問題を含んでいる。そのことは更にまた、社会科教育の他の分野においても、地理的分野において扱う地名が歴史的な背景を考慮した上で扱われなければならないこと、公民的分野においては社会経済史の問題と関わって地名にも関心をもつべきこと、などの点について多面的な検討が必要である。

社会科教育において今、地域に関する学習の必要性が増している。それは、社会が「地方」や「地域」への関心を強めていること、いわゆる新学力観と称する観点に立てば身近な地域における学習も重要視されねばならないとされてきていること、など多くの理由が

* 岩手大学教育学部社会科

ある。その地方あるいは地域の学習において、地名は基礎的なものとして重視されなければならないのである。

本稿では地方名「奥羽」と「東北」とを取り上げその歴史の変遷の問題について、歴史分野、地理分野ならびに公民分野のそれぞれの視点からの検討を行った。なお、公表予定の、地名「東北」の戊辰戦争～明治初年における用例の問題（米地1995）や、明治中～後期における意味の変化や、その後の開発に関わる問題（米地ほか1995ab）に関する諸論考も、併せて御批判いただければ幸いである。

Ⅱ 地方名「奥羽」と「東北」の歴史

Ⅱ-1 古代における「東北」

東北という地名がいつから使われたかを論じる際に、留意せねばならないのは、現在「東北」と呼ばれている地方が、方位として東北つまり北東に位置すると考えられてきたのか、どうかの問題である。この問題については、既に大石（1980）、熊田（1989）などをはじめ多くの論考があるが、ここでは「東北」の語そのものに関わった論点のみに限って論ずることにする。

古くは、『日本書紀』の齊明天皇5（659）年の項にある伊吉連博徳の書（いきのむらじはかこのふみ）に、第4回目の遣唐使が陸奥の蝦夷を連れて行き、洛陽で唐の皇帝高宗に見せたという件りがある。そのとき「蝦夷の国いずかたに在りや」との天子の問に対して、使者は謹んで「国は東北に有り」と答えたという。蝦夷に何種あるかという問に対しては、都加留（つがる）、麓蝦夷（あらえみし）、熟蝦夷（にぎえみし）があると答えている。

高橋崇（1986）は、「国は東北に有り」という答えの「東北」に「うしとら」と振り仮名をして、「東北」とは、北東の方角という一方位と見なしている。この問答に限っては、一方位を指す答えだった可能性はある。しかしながら、当時の日本人および中国人の感覚では、蝦夷の住む地方は、東北つまり北東の方角という一方位というよりも、東方と北方との二つの方位として広い範囲を考えていたとみるべきであろう。このことは、『旧唐書東夷傳』に東夷すなわち倭国について「其国界、東西南北各数千里、西界南界咸至大海、東界北界有大山為限、山外即毛人之国」と明らかに東界と北界と分けて二つの方角になっていることと対応している。したがって、前記の使者の答えも、二つの方位を併せて答えた可能性も残る。

このころのこととして、齊明天皇4（658）年及び6（660）年の二度にわたる阿倍比羅夫の遠征があり、これが日本海側を北上するルートをとったとされているので、秋田以北は北陸道からの延長としての北という感覚であったと思われる。従来、東の奥とされてきた太平洋側の日高見国と合わせて、東北という表現を用いたのであろう。大和朝廷の勢力の及ばぬ、いわゆる東と北の「まつろわぬ」地域一帯を漠然と指しており、まとまった一地方としての名称ではなかったのである。

それ以前の齊明天皇元（655）年の項には、北の蝦夷99人と東の蝦夷95人に難波の宮廷で饗応したという記事があり、前者は越の、後者が陸奥の蝦夷であるといい、東と北とに蝦夷の居住地域があると認識されていたのである。（越には狄が住むとする場合もある。）

漢民族の居住地域を世界の文化の中心として、四囲の民族を東夷西戎南蛮北狄と呼んだ、いわゆる中華思想にもとづけば、日本は東夷そのものである。しかしながら、日本も文化の進んだ地域であることを、唐などに示すために、同じように周辺に朝貢する異民族のあることにしたかったのであろう。その場合、日本は東夷ではなく、さらに東に真の？東夷や北狄もある（西戎や南蛮を想定することは困難であったが）ことを唐に示そうとし、蝦夷の住む地域を「東北」と返答したのであろう。

これより古い時代のもので、『日本書紀』の紀元1～2世紀に当たる景行天皇紀に、武内宿彌の報告や日本武尊への詔勅の記事があるが、そのまま記された時代の記録とするのには疑問が多く、はるかに後代の齊明天皇のころに作られたものと考えられている（高橋崇1986）。その日本武尊の伝説的記述の中に、勅語として「東夷」を討つように命じられたとある。その「東夷」を征したのちも、越の国などがまだ王化していないとして吉備武彦を越の国に探索に遣わしたとされる。「東夷」平定の奏上をした日本武尊は間もなく亡くなる。越には遠征していないのであるから、越の住民は「東夷」には含まれないことになる。したがって、越は北狄と目されたのであろう。

現東北地方の日本海沿岸は、むしろ越後の延長として認識されていた。『続日本紀』の和銅元(708)年の項に、「越後国言す。新たに出羽郡を建つ」、和銅5(712)年の項に、「始めて出羽国を置く」とあって、さらに「陸奥国の最上置賜二郡を割き出羽国に隸す」とある。つまり、日本海沿岸の越後国の尖端部を出羽国とし、これに日本海斜面内陸部の最上置賜を編入させたのである。北陸道の延長としての越の国の出端(いでは)である出羽以北¹⁾には狄が、東山道の道の奥としての陸奥以東には蝦夷が、それぞれ住んでいるとも理解されていたらしい。

したがって、一方、一つの地方としての東北に蝦夷が住んでいたと見なされてはいなかったものであり、東の蝦夷と北の蝦夷、もしくは東の夷と北の狄との二つの方角の二種の人々がいると考えられていた。すなわち地名としての「東北」は存在していなかったのである。また、古代、平安時代の中頃までには東の延長の陸奥と北の延長の出羽とは別個の地域²⁾とみられ、政治的にも統一されていず、都人のとらえ方も歌枕「みちのく」は陸奥にのみ用いて出羽には用いなかった。

II-2 古代～中世における「奥羽」

陸奥・出羽2国は、はじめから「奥羽」として一体のものと認識されていたのではなく、またその領域は現在の東北地方と同一だったわけでもない。

古代律令国家の支配地域としての陸奥国および出羽国の領域は、いうまでもなく、エミシの地を征服することによって拡大してきたものである。その過程について詳述することは割愛するが、律令国家による対エミシ征服戦争が一段落した9世紀後半において、陸奥国の最北端は斯波郡であり、出羽国では雄勝・平鹿郡だった(今泉隆雄, 1992による)なおここのいう「北端」とは現在の用法であり、当時においてもそのように意識されていたというわけではない。後世の閉伊・糠部・津軽・鹿角・比内・能代等の地はなおエミシの地であり、これらに対する前進基地として、陸奥側では胆沢郡に鎮守府が、出羽側には日本海岸沿いに秋田城が設置されていた。

9・10世紀におけるエミシに対する戦争と外交(すなわち征夷)と国家の版図拡大は、

鎮守府と秋田城という二つの拠点から、陸奥・出羽それぞれで行なわれていた。もちろん相互に緊密な連絡を取りつつ征夷が実行されたにせよ、基本的には、古代国家は現在の東北地方をこの二つのルートを通して支配しようとした。このような体制が大きな変容を余儀なくされるようになるのは、11世紀後半のことである。

11世紀後半は動乱に明け暮れた時代である。安倍頼良（頼時）が陸奥守に叛旗を翻したのは永承年間の末で、乱が終結するのが康平5（1062）年である。頼義のあと陸奥守となった源頼俊は、治暦3（1067）年以降「衣曾別嶋の荒夷並びに閉伊七村の山徒」への大規模な遠征を行なった（書陵部所蔵「御堂摂政別記裏文書」）。後三年合戦は永保3（1083）年にはじまり寛治元（1087）年に終わるが、その数年後には出羽で平国妙の国府焼き討ち事件（『中右記』寛治8年3月8日条）があり、前後して藤原清衡が国守の制止をふりきって合戦を企てているとの報告が陸奥国よりなされている（『中右記』寛治6年6月3日条）。もちろん小康状態ともいうべき期間はあるが、ほぼ半世紀ものあいだ断続的に戦乱が起こっている。従来ともすれば前九年・後三年合戦のみが注目される傾向があったが、これらを一連のものとしてとらえなければならない。

これらの戦乱・遠征はそれ以前のものに比べて大規模な点が目をひくが、同時にそれらが陸奥・出羽両国にまたがった事件であることを見逃してはならない。前九年・後三年合戦が奥羽両国をまきこんだ事件であることはいうまでもないが、治暦3年以降の源頼俊の遠征も清原真衡の兵力を動員して行なわれ、それゆえ真衡は恩賞として鎮守府将軍に補任されている。寛治年間の出羽国における平師妙の乱を追討したのは、陸奥守源義綱であった。国家の立場からいえば、陸奥・出羽、およびその背後に広がる地域は、もはや統一的に支配しなければならない状況にあった。

遠藤（1976）は、前九年・後三年合戦を契機に、鎮守府が秋田城の機能を吸収し陸奥・出羽両国とその奥地の統一的支配の機関となったと指摘している。炯眼というべきだろう。ただし当時の鎮守府の具体的な様相はなお不明である。この時期の鎮守府将軍の権能を強大なものとする根拠は、必ずしも確かなものではない。菅野文夫（1992）は、前述の治暦年間の遠征などの過程から、陸奥守が、鎮守府と秋田城の双方の在庁官人を掌握する清原氏を直接に配下に組み入れていたとする。この陸奥守-清原氏による「北方」支配体制が解体する端緒が後三年合戦だったと考えたい。

いずれにせよ、この内乱時代を勝ち抜き、12世紀初頭平泉に居をすえた奥州藤原氏によって、奥羽両国は、少なくとも軍事的側面においては、統一的に支配されることになる。初代清衡のいわゆる天治3（1126）年の「中尊寺供養願文」に「弟子苟も祖考之餘業を資け、謬て俘囚之上頭に居り、出羽・陸奥之土俗風に従う草の如し」とあるのは、そうした政策の表明といえよう。また4代泰衡は「出羽・陸奥押領使」を称したとされる（『吾妻鏡』）が、このことはすでに大石（1978）の指摘にあるように、奥州藤原氏が「陸奥・出羽両国にまたがる一元化された広域軍政府」だったことの何よりの証左であろう。

もっとも藤原氏が両国に対して行使した権限は、一貫して軍事的な側面に限定されていたわけではなかろう。『吾妻鏡』文治5（1189）年12月6日条を見ると、藤原氏を滅亡させた源頼朝は「奥州・羽州地下管領」の権限を手に入れたように記載されており、そのほぼ60年後の宝治2（1248）年2月5日条にも、頼朝が「奥州に入り藤原泰衡を征伐し、鎌倉に帰らしめ給うの後、陸奥・出羽両国知行すべきの由、勅裁を蒙らる、これ泰衡管領の跡た

るによるなり」とある。この奥羽両国に対する地下管領権は、両国の知行国主・国守とは別ルートで、国衙在庁官人を指揮する権限だったことはすでに入間田(1978)の指摘があるが、この権限は鎌倉幕府によって創始されたものではなかろう。そのことは前掲『吾妻鏡』宝治2年の記事に、「泰衡管領の跡」とあることから窺われる。菅野成寛(1995)は3代秀衡の時期には、奥州藤原氏はこの権限を掌握していたとするが、首肯されるべき見解と考える。

奥州藤原氏の時代について、今ひとつ見逃してはならないことは、この時期に奥羽の領域が確定されることである。この点は陸奥国において顕著である。11世紀後半に藤原明衡によって書かれた『新猿楽記』には、八郎真人なる人物が登場するが、彼は日本国中を股にかけて活躍する理想化された商人である。その活動範囲は「東は俘囚の地にいたり、西は貴賀の嶋に渡る」とある。これは当時の中央貴族の意識における日本の西および東の涯を示すものだろう。西が「貴賀の嶋」という具体的な地名を挙げられているのに比して、東を漠然と「俘囚の地」とせざるをえないのは、東山道の東端の陸奥国と、その「東」に広がる蝦夷の村との境界が曖昧であった状況を示唆している。しかし12世紀になると、これが津軽外浜という具体的な地名に確定されるようになる。このことは、すでに大石(1986)や遠藤(1992)などが指摘するように、奥州藤原氏のもとで奥羽全域に中世的郡郷制の編成がなされ、蝦夷の地が現在の北海道に限定されるようになったことを背景にしている。

以上のことからして、陸奥・出羽両国を一体のものにとらえる地域認識が生まれ、かつその領域が現在の東北地方とほぼ重なりあうようになるのは、12世紀、藤原氏の時代のことと結論して大過なからう。

この藤原氏を滅ぼした頼朝は、鎌倉幕府を開き、まず東国、すなわち東海、東山、北陸の三道を支配する武家政権として成立させ、その権力をやがて全国に及ばせた。ついで、足利氏は奥羽両国を管轄するものとして奥州総大将という軍政官をまず置き、のち奥州管領が奥羽全域を統治した。幕府の衰退期には奥州探題と羽州探題とが分割統治する体制になるが、一般に中世は「奥州」の名のもとに奥羽が一まとめに扱われることが多く、現東北地方が具体的に一つの地域として扱われるようになった時代といえよう。

奥羽二国を一括して考え、その支配を重視した点では、豊臣政権も同様で、天正19(1591)年「奥州奥郡の御仕置」という秀吉の東北再進駐は、東海道からの相馬通り侵攻軍、東山道からの二本松通り侵攻軍、北陸道からの最上通り侵攻軍という三軍体制で全奥羽の掌握を図ったのである。前年からはじまるこの一連の事件は現東北地方全域がその対象となったので「奥羽仕置」とも呼ばれた。

II-3 中世～近世における「東北」

平安時代から江戸時代中期までの長い期間、地域を指すものとしての「東北」という語は、ほとんど用いられていない。艮(うしとら)の方角として縁起の悪いこの語を、積極的に用いることは避けたのであろう。この長い期間、それ以前と同じく現東北地方は北東の方角にあるというよりも「東の奥」とみられがちであった。

『袖中抄』の中の「いしぶみ」の項に「…陸奥のおくにつぼのいしぶみ有。日本の東のはてと云り。」とある。江戸時代になっても、「東国」といういい方が続いており、それは蝦夷ヶ島すなわち現北海道や千島まで包括するものとなった。例えば宝暦12(1762)年刊

行の『東国名勝志』は、「えぞがち島」や松前に始まり、近江に至る広い地域すなわち、都である京都の東方一帯の名勝を取り上げている。

このような「東」として、ないしは「東」の一部として現東北地方をとらえる見方は、江戸時代を代表する地理学者である古川古松軒の現東北・北海道の紀行文が『東遊雑記』であり、同じく橋南谿の『東遊記』が北海道から近江までの記事を含んでいること、などにもみられる。もちろん、近江から越前へ抜ける街道は「北国」街道であったが、広い意味では「東」なのであった。ただし「東国」と国をつけて呼ぶ場合は「北国」は除かれることが多く、前記の『東国名勝志』にも近江や、越前など現北陸地方は勿論のこと、出羽すら含まれていない。例外は高山彦九郎の『北行日記』であるが、奥羽から京までの旅なので「北」にしたのかも知れない。

江戸時代においても、畿内を中心とする地域区分の考え方が生きており、北陸道は北国、東海道と東山道は「東国」なのであった。したがって現東北地方は東国なのである。

この「国」という見方を外せば、北陸道、東山道、東海道という三つの地域（三道）は、まとめて見られることが多かった。古来「三関」といういい方があり、本来は北陸道の越前国愛発（あらち）関³⁾、東山道の美濃国不破関、東海道の伊勢国鈴鹿関が挙げられていた。「奥羽三関」という場合は北陸道口の念珠ヶ関、東山道口の白河関、東海道口の勿来（菊多）関であり、いずれも三道に対応している。

現東北地方については、「奥羽」と称されており、時には「奥両国」などとも称された。芭蕉も『奥の細道』のなかで「奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて」と書くなど、ほとんど全ゆる場合に「奥羽」、「奥」もしくは「みちのく」と書かれている。

江戸時代の代表的な科学者帆足萬里の地政学的な著書『東潜夫論』（1844、弘化元年）は、東海、東山、山陽、北陸などを官道と呼び、道路としての面を取り上げたり、「東諸侯の船は東海、松前、箱館邊より江戸に漕する用とし」「北諸侯の船は羽越より下関に漕する用とすべし」などと書くなど従来の地域観を踏襲している一方で、日本を東州、中州、西州の三地域に分けているなど、新しい地域観の萌芽もみられる。ただし現東北地方については奥羽という呼び方も用いている。

近世末に東北という語を用いた例としては、俳人青岐（阿波屋安兵衛・嘯斎）の『東北遊』、肝付七之丞（兼武）の『東北風譚（談）』、吉田寅次郎（松陰）の『東北遊日記』などがある。これらの題の東北は現東北地方のように考えられがちで、これらを論じた書は皆、そのような解釈をしている。たしかに現東北地方も旅しているが、三者ともより広い地域の旅の記録である。

『東北遊』は寛政6～7（1794～5）年の旅の紀行文で、管見によれば「東北」を冠した題の書籍の初出であるが、その巻頭に「寛政六甲寅の夏、さつきのすゑ、奥羽越路の行脚すとて…」とあり、奥羽と北陸を旅の目的としている。上方を発ち、略前半部は、木曾路や東海道、関東などの旅を記し、後半の三分の二が奥羽、残りが北陸となっている。

『東北風譚（談）』の旅は1840年頃（天保年間）、関東、現東北、北陸、現北海道などにわたるもので、『東北遊日記』の旅《嘉永4（1851）-嘉永5（52）年》は現東北のほか越後や佐渡への旅の記録であり、さらに、この旅の主目的が水戸訪問にあったことは良く知られている。それゆえ、これらの書の場合の東北も、やはり現東北地方よりも広い地域を指しているのである。

II-4 幕末～明治初年における明確な地方名の「東北」の登場

かなり明確な地域名としての「東北」が、慶応4(1868)年、新政府側の東日本への侵攻の際、東海道、東山道、北陸道の総称、すなわち東北三道の略として用いられたものであること、戊辰戦争に関わっての初現が同年正月であること、は筆者の一人米地(1995)が明らかにし、岩本(1994)の「東夷北狄の略で初現が慶応4年7月ごろ」という説を否定した。

この時期に、なぜ東北三道あるいは東北諸道などの地域概念が用いられたのであろうか。その理由として、次の三点が挙げられよう。

第一には、古来唯一の地域区分というべきものが五畿七道であったこと。

第二には、薩長勢力は公家と結んでおり、自分たちの東日本侵攻を古代史における伝説的な四道將軍の故事になぞらえたこと。

第三には、徳川幕府のもとでの江戸を中心とした五街道という交通網とは異なった、古典的な畿内中心の交通網の強調により、王政復古の号令との整合性を持たせたこと。

以上の三点があげられる。第二の点は、岩本(1994)の薩長が「東北を東夷北狄になぞらえた」という説と、古代になぞらえたとする点では共通するものはあるが、「東北」という地名の由来は、侵攻する側の進軍路～侵攻地域をなぞらえたのであって、侵攻される側の異民族?をなぞらえたものではない。

この時期、近江国以东の東日本が広く「東北」と呼ばれたのであり、幕府の勢力の強い東海、関東、甲信、北越、奥羽などを総称していたのである。

慶応4年は改元により明治元年となったが、薩長政府などの用いた、いわば広域の東北の用例は、その後明治中期まで散見されるものの使用例は少ない。しかしながら、広域であった「東北」は、次第に奥羽地方の別称として使われることが多くなり、ほぼ現東北六県地域を指すものとなっていった。

その明確に6県域を示した最初の例は、管見によれば、おそらく自由民権運動家たちが、自らの地域を呼ぶ新しい用語として「東北」をえらび、「東北七州自由党」としたものが挙げられるであろう(米地ほか1995a)。その傾向が強まるのは、現東北地方に頻発した災害、特に明治後期の冷害により、大きな被害を受けたため、その被災地域の立ち直りのため、東北救済、東北振興、東北開発などが叫ばれるようになり、歴史的な地方名「奥羽」よりも「東北」という寒冷な気候を持つ地域を連想する地方の名が多用されるようになったのである。

吉田東伍の『大日本地名辞書』は、明治34(1906)年に初版が出るが、「東北」が奥羽を指すようになった当時の用例を「俗に」というところの東北六県と書いている。東北が奥羽を意味する狭い意味に用いられるのは、社会的、政治的な場に限られ、(郷土教育を除けば)地理教育の場に登場するのは、ようやく第二次大戦後になる。

III 明治中期以降の現東北六県を指す「奥羽地方」と「東北地方」の地名としての性格

III-1 対象地域の範囲の明確度

一般には東北六県を意味すると考えられる傾向になったとはいえ、「東北地方」という地名は、明治期にはなお、その範囲が曖昧であった。

明治40(1907)年には東北帝国大学ができるが、これは仙台の理科大学と札幌の農科大学とからなるものであり、現在の東北地方に限定されるものではなかった。大正4(1915)年医科大学も創設した東北帝国大学は、大正7(1918)年、農科大学を分離し、現東北地方のみに立地する大学となる。

一方、明治42(1909)年に、政府は鉄道公債を発行して、主な私鉄を買収し、鉄道院を設けて管轄させた。その年10月に鉄道院は告示によって諸鉄道路線名をまとめ、かつ改称した。このとき「東北線」としたのものには、次の各線が包括された。

東北本線、山手線、常磐線、隅田川線、高崎線、両毛線、水戸線、日光線、岩越線、塩竈線、八戸線

このうち東北本線は、日本鉄道の奥州線である。総称である「東北線」のうち、現東北地方と関東地方を結ぶもの2線、現東北地方のみを運行するものが3線、関東地方のみを運行するものが6線、となっており、現東北地方を運行するものうち岩越線は名の通り越後まで連絡する予定だったもので、のちの磐越西線になる。したがって「東北線」という名は、やはり東海道、東山道、北陸道の三道にまたがる「東北」という認識に立っていたのである。しかし、東京から見た目的地の地域名に由来する「奥州線」の名が、路線全域の地域名に由来する「東北線」に変わったにもかかわらず、一般には「東北」も目的地の地域名として受け取られていった。

古い五畿七道の区分と新しい東北地方という名称との橋渡しに当たるような用例として、明治時代末に広く読まれた田山花袋の『新撰名勝地誌』がある。全12巻のうち現東北六県を扱う巻(1911, 明治44年発行)は『東山道東北部』と題されている。このシリーズは五畿七道区分にしたがっているが、東海道は東部と西部に、東海道は東北部と西部に分けている。ただし本文では「此処に言ふ東山道東北部は、即ち奥羽地方」とあるほか、「東北各地」とか「雄を東北に称したり」などと「東北」も用いている。

この時期すでに佐藤傳蔵・山崎直方著の『大日本地誌』全10巻⁹⁾が同じ博文館から刊行されているが、こちらは現東北地方の巻は『奥羽』となっている。このように、地理学的には「奥羽」、一般社会では「東山道」「奥羽」ないしは「東北」の併存状態であることを示しているのは興味深い。当時、日本地理の参考書として評価の高かった角田ら(1911)の『大日本地理集成 全』には、「奥羽地方は本州島の東北部を占め…」などと、概ね「奥羽地方」を用いているが、部分的には「東北地方の人士」などと「東北地方」も用いている。この本州島東北部という見方は、前記東山道東北部とともに、狭義の「東北」という概念を後づけ的に説明するものとなっている。

その一方で、北海道と現東北地方の一部とを合わせて「東北地方」とする用例も、第二次大戦以前には時折見られた。例えば昭和7(1932)年刊行の『師範教育 内外地理通説』(西田与四郎著)は師範学校地理科用教科書として文部省の検定を通ったものであるが、その中で、人口密度の大きい地方として、東京・大阪・神奈川・福岡・愛知等の地方を挙げたのち、こう書いてある。

これに反して人口の稀薄なるはその地理的環境が前記地方に比して稍、劣っていた地方即ち北海道・岩手・秋田・青森等の東北地方、宮崎・高知等の西南日本の外帯で、朝鮮の西南部・台湾の西部よりも密度が小である。

なお、この教科書では現東北地方のみを指す場合には「奥羽地方」と呼称している。このように、明治後期から昭和前期までは、東北という呼称には、次のような多様な用例があったと考えられる。

- ① 東海道、東山道、北陸道を合わせたもの
- ② 関東地方、奥羽地方、新潟県などを合わせたもの
- ③ 奥羽地方と新潟県を合わせたもの
- ④ 奥羽地方と北海道とを合わせたもの
- ⑤ 奥羽地方（東北六県）⁹⁾

このうち、①から③までは東北三道という考え方とその延長である。

この区分の多様性は、東北日本という呼び名とも関連がある。本州以南を東北日本と西南日本に分けた場合は、①②のような地域が東北日本であるが、北海道を含めて東北日本、中部日本、西南日本と分けた場合には、④のようになる。

こうしてみると、鉄道の東北線は②、草創期の東北帝国大学は④になる。①～④のいずれの用例にも、必ず含まれている範囲は奥羽地方、つまり現東北地方であり、最終的に⑤に落ち着くのもうなずける。

とはいえ、現在でも東北七県として新潟県を含む用例があり、旧国の領域という明確な範囲を示す「奥羽」に比して「東北」はなお曖昧さを残しているのである。

Ⅲ-2 地名としてのの使いやすさの比較

範囲が曖昧であるにもかかわらず、「東北地方」が多用されてゆく理由の一つは使いやすさである。

一般に「東北」が吉田のいうように奥羽の俗称として定着していったのは、「奥羽」という地方名のもつ使いにくさが関わっているであろう。北陸とか近畿（または畿内）のような古くからの畿内七道に由来する地方名や、九州、四国などという集合内部の構成を数で示す地方名と異なり、奥羽は旧国名二つを合わせたものである。地域全体を指すには支障はないが、地域の中の一地点を示す場合などには違和感がある。例えば九州出身とか九州人といういい方はあるが、奥羽出身とか奥羽人とは普通いわない。このような場合は奥州出身とか羽州の人というであろう。奥州仙台とはいうが奥羽仙台とはいわず、また北陸の旅といえば北陸のどこの旅行に対してもいえるが、奥羽の旅といえば旧奥州と旧羽州とにまたがった旅と理解されるのが普通である。さりとて、古来奥羽の総称として使われていた「みちのく」は、漢字で書けば陸奥となり、旧奥州かほぼ青森県を指す新陸奥かに間違えられやすく、使いにくい。さらに「奥羽」が古臭く、かつ発音しにくく聞き取りがたいのに対し、「東北」が新鮮なイメージで、明瞭に聞き取れることも関係しているであろう。

また、「奥羽」という地方名からは、日本のどこに位置するかが直ぐには分からないのに対し、「東北」は日本の中の相対的位置がすぐ連想できるという分かりやすさもある。日本の地方名、特に東日本のそれは、北海道、北陸、関東、東海など、方位「北」または「東」が入り、畿内七道の変形ともいうべきものか、中部地方のように日本国内における

位置を鮮明にして命名したものが多く、例外的な甲信越などは使用頻度が低い。

結局、地域の範囲は明確に示すが使いにくい古いイメージの「奥羽地方」よりも、地域の範囲は不明確だが使いやすく、日本国内での位置がわかりやすい、新しい感じの「東北地方」の方が好まれ、この「東北地方」を奥羽と同じ地域として範囲を限定してゆき、人々が多用するようになってゆくのである。

Ⅲ-3 「奥羽」と「東北」とのイメージの比較

「奥羽」が「奥羽列藩同盟」などの古いイメージであるのに対し、「東北」は先進的、進歩的イメージであると受け取られた。高橋富雄(1982)は「日本の片隅に閉じ込められた『奥羽』の観念を、『没価値的』(ウェルト・フライト)な地理的観念に合理化して、そのイメージ・アップをする考えがあったと思われる。」と書いているが、「没価値的」というよりは、むしろ新しい価値を持つものとされたと筆者らは考える。

東北という名が新しさや知的、先駆的イメージをもつものと考えられたことは、新聞や雑誌の題名に多数登場することでもわかる。その幾つかの例(特に注記のないものは創刊)を挙げてみる。

- 1874(明治7)年:「東北新聞」(仙台)⁶⁾
- 1880(明治13)年:教育専門雑誌「東北教育新聞」(盛岡)
- 1880(明治13)年:「東北新報」(仙台)
- 1881(明治14)年:「東北毎日新聞」(仙台)
- 1889(明治22)年:「東北日報」(新潟),「有明新聞」が改題,のちの「新潟東北日報」
- 1892(明治25)年:「東北日報」(仙台)(30年「河北新報」と改題)
- 1892(明治25)年:「東北新聞」(仙台)
- 1899(明治32)年:雑誌「東北の産業」(仙台),「恒産雑誌」が改題
- 1914(大正3)年:「東北日報」(会津若松),
「新潟東北日報」の他紙への吸収に伴い分離
- 1917(大正6)年:月刊誌「東北評論」(盛岡)
- 1918(大正7)年:月刊誌「東北日本」(仙台)

地名「東北」が新しいという印象を持つのみならず、文化的なイメージも含むことは、新聞・雑誌の題名にかぎらず、学校名などに用いられたことから分かる。明治19(1886)年創立の仙台神学校は明治24(1891)年に東北学院と改称している。

さらに、鉄道と帝国大学という文明・文化の頂点ともいうべきものが「東北」を冠することになったことは、少なくとも現在いうところの東北地方の住民に、この呼び名をプラスイメージを持つものと意識させることになったと考えられる。

作家など文化人も、「奥羽」を用いず「東北」と書くようになっていった。若干の例を挙げれば、古くは島崎藤村は1897年に「河北新報」の発刊に寄せて「われは東北にこの出版の事業あるをよろこび」云々と書いており、寺田寅彦は「東北地方」や「東北人」と用い(1935年の随筆「日本人の自然観」),斎藤茂吉は、短歌では「みちのく」を用いるが、随筆では「東北での城下」とか「東北三陸」など(1937年「三筋町界限」と「東北」を用い、石坂洋次郎も「我が東北地方」(1937年の随筆「東北の温泉」)と書き、横光利一も「東北地方」と書いている(小説「旅愁」の1937年新聞連載部分)。これらは当然のこ

と思われるかも知れないが、後述するように当時は学校の地理教育では「奥羽地方」のみが用いられていた時期のことなのである。太宰治が「自分は東北の田舎に生まれましたので」（1948年の小説「人間失格」）と書いたころ、ようやく地理教育界においては奥羽から東北へ変わる機運になったのである。それ以後においても、もちろん時代小説では「奥羽」が用いられており、例えば松本清張は1954年に「奥羽の二人」を発表している。しかし、伊達政宗と蒲生氏郷を主題としたこの小説でも、その時代の用語としては「奥羽」を使っているが、現代の読者のための用語としては「東北」を用い、それぞれ使い分けている⁷⁾。

観光にも「東北」が用いられた。例えば、現在のJTBの前身である日本旅行協会は、1940年ころ、旅行のガイドブックとして『ツーリスト案内叢書 東北地方』や『日本案内記 東北編』などを出すとともに『東北温泉風土記』、『東北の民俗』、『東北の玩具』など旅行者向けの出版を行い、「東北」の魅力を紹介した。

東北振興や東北開発について、あるいはそれらの問題の歴史については、これまで多くの本や論文（例えば藤原1968や岩本1994）があるので、ここでは省略するが、関係する主な団体や機関、計画等の名と設立・作成年次を挙げておく。

1913（大正2）年 東北振興会（民間団体）

1927（昭和2）年 東北振興会解散・再建

1934（昭和9）年 東北振興調査会（政府の諮問機関）

1935（昭和10）年 東北振興計画（東北振興調査会作成）

1936（昭和11）年 東北興業（株）、東北振興電力（株）、（いずれも国策会社）

第二次大戦下の昭和18(1943)年ですら、東北興業株式会社や東北配電株式会社が東北の有効企業として存在し、その他にも、東北振興繊維株式会社などがあるなど、「東北」という語は経済界においては市民権を確立していたのである。

政治的には、すでに「東北」が定着しており、例えば翼賛体制下の昭和17(1942)年の選挙などの結果についても、北海道、関東、東北、東海、北・信（甲信越・北陸）、近畿、中国、四国、九州の九地方に分けて、報道されているし、同年6月には「東北地方振興第二期五ヶ年総合計画」が計画調査会から発表され、東北振興同盟は臨時総会を開いて、その実施促進への協力を決議している。また、戦争末期の1945年には本土決戦に備えて、1月に東北軍管区司令部が、6月に東北地方総監府が、それぞれ設置された。

このほか、自然科学では近代科学が日本に導入された初期から「東北日本」が用いられたためか、「東北地方」が用いられることが多く、地名「東北」は科学的であるようなイメージももっていたのであった。

Ⅲ-4 「東北」という地名の地理学的問題点

「東北」という地名は不思議な地名⁸⁾である。方位のみをもって地名ないし地域名とすることは、きわめて稀であるし、まして、日本ではいわゆる鬼門である艮すなわち丑寅の方角として、好感を持たれていなかった方角を地方の名とするのは、極めて不自然なことである。

また、奥羽地方から東北地方への移行も、日本の近代において、かなり長い間用いられ、定着していた地方名が変えられた珍しい例である。他には、正式な北海道という名のほか

に「十州」という名が一時期用いられたこと、甲信越や東海、北陸などが中部としてまとめられることが多くなったこと、などの例はあるが、奥羽地方 → 東北地方のような全面的でドラスティックな変化の例はない。

地方名をその意味内容からタイプ別すると、次のようになる。

1. 畿道名タイプ：近畿（畿内）、東海、北陸、山陽、山陰、北海道
2. 位置方位タイプ：中国⁹⁾、関西、中部、関東
3. 構成国数タイプ：九州、四国、十州
4. 構成国名タイプ：甲信（越）、奥羽
5. その他：瀬戸内（海）

「東北」は、本来は1の畿道名タイプであったが、そのうち東北六県を意味するようになってからは、2の位置方位タイプとみられるようになった。このように分類すると、「中部」を除けば、いずれも古くから用いられた歴史的地名であるといえる。「東北」はもともとの性格である畿道名タイプとしてみれば古い歴史的地名であるが、これを現東北六県を指すものとした場合は「中部」と同じ新しい地方名ということになる。この分類をみると、「奥羽」のような4の構成国名タイプは広い地方名としては使用されることが少なくなっているといえる。¹⁰⁾

「東北」は畿道名タイプとしては、複数の畿道名を併せたものであること、位置方位タイプとしては、方位を示す語のみであること、など、どちらのタイプとしても例外的なものといえよう。

世界的にみれば方角のみの地名は、植民地であった地域に多く、辺境とされている地域でもあることが多い。

米国には北東地方（北東部とも訳される）the Northeast があり、特にその中の New England 地方を指すことが多い。オーストラリアの Northern Territory は准州の名である。またパキスタンには北西辺境州などと訳される North-West Frontier Province があり、カナダにも the Northwest Territories がある。これらは、いずれも旧植民地、辺境のいずれか、ないしは双方に該当するのである。

中国の旧満州が東北と呼ばれるようになったのは、これらとは異なり、満州族の支配を脱した漢民族にとっては、満州とは呼ばず、漢民族居住域からみた方角を用いようとした点と、日本の傀儡政権で実質上の植民地であった満州国に用いられた名を避けた点からかつて漢民族がこの地方を呼んだ名を復活して用いられるようになったものであろう。

これらの例に対し、日本では奥羽地方という呼び名がすでにあったのに、特に明確な理由もなく東北地方という名に置き換わったのは異例といえよう。

IV 地理教育用語としての「奥羽」と「東北」

IV-1 第二次大戦前の地理教育と「奥羽地方」

日本においては、五畿七道にわけるといって、いわゆる畿道別という伝統的区分が唯一の広域的な地域区分であった。したがって、明治前半の地理教科書は、いずれもこれを用いていた。その場合当然のことながら、現東北地方は東山道に含まれ、栃木、群馬、長野、岐阜、滋賀の各県と一括されている。

中川(1978)は近代日本の地理教育における地域区分の変遷の問題を取り上げ、当初は伝統的な畿道別区分であったが、明治37年度から使用された国定小学校教科書から、ほぼ今日の形と同じ8地方区分になったことを明らかにし、その創案者を喜田貞吉であろうと推定している。もっとも、中川は、喜田が関係した中学校用教科書における、これに先行する新地方区分が用いられていたことも指摘している。

すなわち、明治32(1889)年発行の幸田成友・喜田貞吉著『日本地理』(金港堂)では、十州、奥羽、関東八州、本州中部東、本州中部西、近畿地方、中国、四国、九州の9区分¹⁾にしている。

ついで、明治33(1900)年発行の喜田貞吉著『日本中地理』(金港堂)では、北海道、奥羽、関東八州、本州中部、近畿地方、中国、四国、九州地方の8区分となる。

いずれの場合も現東北地方は「奥羽」と呼ばれ、それは第二次大戦まで継承された。

筆者の一人米地(1994)は奥羽山脈の名は比較的新しく、中央分水山脈などと呼ばれていて、明治25(1892)年に用例があるものの定着せず、明治43(1909)年の第二期国定教科書から「奥羽山脈」に統一され、定着したことを明らかにした。そして「奥羽山脈」は奥羽地方の中央を走るものとして、「奥羽地方」という呼び名とセットにして用いられてきたと考えた。第一期国定教科書で「奥羽地方」が定着し、第二期国定教科書で「奥羽山脈」が定着したわけである。

その後、社会一般では「東北地方」が用いられるのであるが、国定教科書は「奥羽地方」の呼称を変えず、いわば地理教育のみの特殊な用語に近い形で推移した。

教科書以外の地理学書では、「奥羽地方」と「東北地方」とを混用してはいたが、やはり「奥羽地方」が圧倒的に多いのが普通であった。その一例として内田寛一(1933)の『郷土地理研究』を取り上げてみると、より広く「東北日本」と呼ぶ例は多いが、「東北地方」は3回の使用にとどまっているのに対し、「奥羽地方」は12回も用いられている。この傾向は人文地理学者に顕著であり、自然地理学者の場合はむしろ「東北地方」の使用頻度が多い傾向があるが、数的に人文地理学の優勢だった第二次大戦前においては、地理学全体としては、やはり「奥羽地方」が圧倒的に優勢であった。

IV-2 郷土教育用語としての「東北地方」の登場

国定教科書をはじめ地理教育界では「奥羽地方」のみが用いられていたが、その一方で郷土教育のための副読本には「東北」が使われていた。なかでも『東北読本』は昭和13(1938)年に文部省が刊行した上下2巻のもので、政府の東北振興事業の一つでもあった。

また、各市町村も郷土読本を刊行していたが、これらの中でも「東北」が用いられている。例えば仙台市教育会発行の『我が仙臺』(1933初版)の1939年版では、「東北第一の都会といはれる我が仙臺市は」、「國土計畫にもとづく東北工業の基地としての仙臺市は」などと、使われている。

岩手県西磐井郡山目小学校(現一関市)の『山目郷土読本』上下巻(1935年)にも、「東北随一」を誇っていた工場とか、「東北の巨流北上川」、山目の町を「東北の小京都とも言ひたいほど」などと書かれている。

つまり、「東北」振興のための郷土教育、郷土愛を育てる郷土教育を目指して作られた読本であるから、「東北」という地方名は、当然のことながら、郷土の誇りや明るい未来

への期待をこめて用いられているのである。それとともに既に社会では多用されている「東北」が、郷土読本では追認するような形で普通に使用されていた、ともいえよう。

IV-3 地理教育用語としての「東北地方」への転換

第二次大戦直後の日本において、強く叫ばれたことの一つが「封建性」の打破であった。「奥羽地方」という名は、封建的なイメージをもつ地名として、急速に姿を消していった。

昭和26年度発行、同27年度使用中教出版の『中学生の社会科 日本の生活 世界の生活』では、東北日本の中を三分し、関東、東北（奥羽）、北海道としている。なお、日本は東北日本のほか、中央日本が近畿、中部に、西南日本が九州、瀬戸内海地方に、それぞれ分けられている。

昭和29年度発行、同30年度使用中教出版の『中学生の社会科 日本の国土』では、東北日本は二分され、東北（奥羽）地方と北海道地方からなり、中央日本に関東地方、中部地方、近畿地方が、西南日本に九州地方、瀬戸内海をはさむ地方（中国地方と四国地方）が含まれていた。

昭和29年度発行、同30年度使用の東京書籍の中学生用の『新しい社会① 自然と社会 日本の自然と社会』では、日本は七地方に分けられ、北海道地方、東北（奥羽）地方、関東地方、中部地方、関西（近畿）地方、中国・四国地方、九州地方となっている。

これらは奥羽をカッコに入れ、過渡期の様子を示している。

一方、単に東北地方とのみ書くものとしては、昭和26年度発行、同27年度使用の学校図書『中学社会 私たちの生活圏』、昭和29年度発行、同30年度使用の学校図書の『中学校社会 日本の国土』、昭和27年度発行、同28年度使用の日本書籍の『中学生の社会2 わが国土』、昭和31年度発行の日本書籍の『中学生の社会 土地と生活上』などがある。

その一方で、戦前からの呼称である奥羽地方を使い続けた例もみられ、例えば日本書院の田中啓爾著『高等地図（七訂版）』は昭和34年の発行であるが、地方別の一般図において「奥羽地方」の名を用い、気候区分図においても、「奥羽東区」、「奥羽西区」などの名を使っていた。しかし、この地図帳も昭和37年版では、「東北地方」に変え、気候区分図も、「奥羽東区」は「三陸区・常磐区」に、「奥羽西区」は「東北区」に変わった。高橋富雄（1982）は「戦後は『奥羽』という言い方はなくなり『東北』に統一されている」としているが、このように昭和30年代半ばまでは「奥羽」が残っていたのである。

V 歴史教育・公民教育からみた用語「奥羽」と「東北」の問題点

V-1 歴史教育用語としての「奥羽」と「東北」

中学校社会科の歴史分野の教科書では、「奥羽」や「東北」はどう使われているだろうか。ちなみに東京書籍の『新訂 新しい社会 歴史』（1989）をみてみる。

例1：「平城京とならんで、九州には太宰府、東北地方には多賀城の役所が建設された」

例2：「朝廷は、東北地方の蝦夷を支配するために、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて遠征させ」

例3：「11世紀の後半には、東北地方にあい次いで大きな戦乱が起こったが」

例4：「東北地方の平泉（岩手県）を中心に、藤原氏を名のる豪族が栄えた」

例5：（新政府軍は）「幕府を擁護する会津藩をはじめ、東北地方の諸藩を攻め」
などと書かれ、「奥羽」は全く用いられていない。「奥州」は奥州（の）藤原氏という2箇所
箇所に用いられている。

国名や都市名の場合は、清国や江戸などと歴史的地名としてそのまま用いられるのに対し、日本の地方名の場合も例外はあるものの、多くは九州、四国、中国など昔からの地方名をそのまま使っている。また地方名が変わったものの例としては現北海道が必要により蝦夷地と書かれている。この蝦夷地と同じに考えれば、少なくとも、上記の5例のうち例3～例5は「奥羽」地方と記す方がよいと考えられる。また例1と例2の場合、過去にはしばしば東北経略などといわれることがあったが、その場合の東北は、現東北地方の意味ではなく、都の東方と北方を指すものか、あるいは広義の東北（東北三道）の意味で用いられていたため、この場合も「東北地方」と書くことには問題が残る。

いずれにしても、「地方」という総称詞は、歴史上、近世以前の、その時代々々の人々の用いたものではなく、「平野」とか「半島」と同じく近代的概念である。したがって、もし用いるならば、「現在の東北地方にあたる地域」という意味で「東北地方」が用いられるわけであり、そのことが明示されないまま、安易に「東北地方」が用いられるのは、あたかも「東北」が「九州」と同じ類いの近世以前の（中世の「九州探題」にみられるような）歴史的地名としての性格ももつと誤解させることになる。

さらに最近の高校用教科書の例もみてみよう。（『日本の歴史』山川出版社、1994）

例1：東北地方では陸奥国と越後国をわけて出羽国をおき（後略）

例2：蝦夷は（中略）大和朝廷の支配に服さなかった東北地方の人々を意味した。

例3：陸奥・出羽の豪族安倍氏を前九年の役、清原氏を後三年の役でほろぼした。

例4：秀吉は（中略）伊達政宗ら東北の諸大名もことごとく服従させて全国統一をなしとげた。

例5：会津藩をはじめとする東北諸藩も奥羽越列藩同盟を結成して抵抗した。

以上の5例は、例4を除き、ほぼ前掲の教科書と同様の事例について例示した。比較すると後者は、例3で陸奥・出羽としたことや、例4・5で「東北地方」とせず「東北」としたことは、より妥当である。特に例5は「東北諸藩」の中に奥羽のみならず越後の藩も含まれることを示しており、適切な書き方である。ただし、「会津藩をはじめとする東北諸藩も奥羽越列藩同盟を結成して」という書き方は歴史的事実と反した受け取られ方をされる恐れがある。奥羽越列藩同盟には会津藩や庄内藩は加盟していない状態で結成されたのであり、実質的な経緯は別として、史実は正確に教えるべきである。

V-2 地名「奥羽」・「東北」に関する社会学的問題点と公民分野

「地名は、すぐれて社会的なものである」として、今泉・米地(1994)は、地名一般を社会学的にとらえるとは、どのようなものかについて考察し、地名は象徴の一つであり、デュルケムの社会形態学的に述べると、地域は「基体」であり、「形態学的事実」であるのに対し、地名は「生理学的事実」である。また「人間が地名を用いるという現実には社会の所産である」から、地名は「アイデンティティ」論と結び付くものとして検討されるべきものである、と論じた。

地名「東北」が、明治初期に現東北地方の自由民権運動家たちによって、それまでの東北三道的な漠とした広義の地名ではなく、自分たちの現東北地方を示すものとして、狭義のものとして切り取り、彼らの集会や集団の名称に冠したことは注目される。そこに近代的「東北人」としてのアイデンティティの萌芽がみられるからである。

地名「東北地方」の問題は、現代社会における地名が果たしている地域イメージの形成の役割を考察するために興味深い問題を有している。すなわち、米地・今泉（1994）が「三陸地方」の検討で行ったものと対比すれば、次のようなことがいえる。

共通点としては：

- ◎地名の成立が明治初年と新しいこと
- ◎明治新政府が多用したこと
- ◎自然災害（津波と冷害）を契機に定着したこと
- ◎より広い地域を指していたものが、上記の災害によって、より狭い地域を指すようになったこと
- ◎次第にプラスイメージへと変わったこと
- ◎地理教育の場では俗用として、その使用がおくれたこと

などが挙げられる。

一方、相違点としては：

- △「東北」はかなり古くから住民のアイデンティティを示すものとして用いられたが、「三陸」はそうではなかったこと
- △「東北」は地域名として完全に定着したが、「三陸」はむしろ自然地理的用語や観光的用例にとどまりがちであること

などが指摘できる。

公民分野において、地方自治や地域社会に関する学習の占めている割合は小さく、今後、地名をはじめ、地域に関わるものをより積極的に取り上げるべきであろう。

VI 社会科教育と地域・地名—おわりに—

社会科教育の場における地名の問題は、多様な視点から考えられ、それはまた、多くの改善ないしは解決すべき課題を有していることを示している。

まず第一に、社会科教育の中で、地名は地理的事象や歴史的事象を説明するための重要さは認められているものの、単なる暗記の対象と考えられがちである。そのため、扱う地名を増やすことは、即児童生徒の負担の増加とみなされ、必要な地名を精選するという名のもとに、本来必要な地名が軽視されることがある。例えば、歴史教育において「奥羽」という地域名は重要であるにもかかわらず、これを「東北」に置き換えているのは、その一例である。

第二には、地理的分野と公民分野の一部（地方自治に関する部分など）を除けば、現在の社会科教育においては、地域ないしは地方を扱う教育は質、量ともに極めて低位のレベルにあるため、地域の地名、ないし地方名が軽視されているといえよう。これは日本の社会科教育が中央中心、国家重視の視点に偏りがちであり、特に歴史的分野にそれが著しいということによるのである。地方名「奥羽」と「東北」の変遷の問題を通じて、この点が

明らかになったのである。地方重視の視点を取り入れれば、地方名はより多用され、それぞれの地方名についても、学習者の理解が深まるような学習内容となってゆくであろう。

第三には、上記二点の課題を改善・解決するための前提となる、地名、特に地方名に関する基礎的な研究が遅れていることである。特に「東北地方」のような新しい地方名については、筆者らの本論文、および米地（1995）、米地ほか（1995ab）の研究までは、部分的、一面的であったといえる。我々の研究にも、まだ多くの不備があると思われるが、今後、御批判やご教示をいただき、地名、特に地方名の社会科教育上の課題を進めてゆきたいと考えている。

注

- 1) 後年には出羽の先には秋の住む土地が続くとするような記事もある。すなわち、『日本紀略』には寛平5(893)年閏5月に渡島の秋と出羽国の浮囚とが対立したという記事があり、『太政官符』康平7(1064)年には、安倍正任が出羽国から秋地へと逃れたという記事もある。
- 2) ただし、もちろん辺地としては陸奥と出羽は同じように意識されていた。『延喜式』(901年、延喜元年)では、京からの距離にしたがって諸国を近国、中国、遠国、辺要の四つに分けているが、このうち、最も遠い辺要は、陸奥、出羽、佐渡、隠岐、対馬の5国で、離島以外は陸奥と出羽のみである。
- 3) のち近江国逢坂関や同国勢多関に置き換えられようになる。
- 4) この『大日本地誌』の編集には、前述の田山花袋が協力者として参加している。(田山 1923, 1981)
- 5) ⑤は、厳密に言えば明治21(1888)年以降に適用できる。なぜなら、福島県は当初は旧会津領を全て含んでいたため、越後の東蒲原郡も県土としていたが、明治20年に新潟県に割愛されてしまうからである。
- 6) 同名の新聞がその前年、明治6(1873)年4月にも創刊されているが、詳細は不明である。なお、明治25年にも同名の他の新聞が創刊されている。
- 7) 例えば「再び失地を回復して奥羽を一手に収めようとする政宗の執念である。」とか「東北はすでに冬季である。」とある。
- 8) このことは、筆者の一人米地が「北鬼」のペンネームで触れたことがある。(「鬼からのメッセージあとがき」、『歴史にみる東北の方位』河北新報社. 210-211. 1991年)
- 9) 中国とは『延喜式』(901年、延喜元年)の、京からの距離による近国、中国、遠国、辺要の別の中の中国である。『延喜式』の中国は現北陸地方や甲信、静岡など中部地方の大部分や四国東部も該当したが、出雲・備後以东の中国が地方名として残り、のち石見・安芸以西も含められた。
- 10) なお、より狭い地域名としては、筑豊、加越、常総などと使われることも少なくない。
- 11) しかし、この旧来の地域区分では纏まりが悪いので、新しい括りが考慮されてゆく。同じ明治23(1890)年の第九年版から『日本帝国統計年鑑』は、全国を七区に分け、北海道、本州北区、本州中区、本州西区、四国区、九州区、および沖縄とした。この本州北区には奥羽6県と新潟県が含まれる。

文献

- 藤原隆男 (1968) : 「東北振興会と東北開発」, 『青淵』, 232, 22-24.
- 今泉隆雄 (1992) : 「律令国家とエミシ」, 『新版古代の日本』(9巻東北・北海道), 163-198.
- 今泉芳邦・米地文夫 (1994) : 「地名の社会学的研究序説—社会科教育と関わって—」, 『岩手大学教育学部研究年報』: 53, 45-54.
- 入間田宣夫 (1978) : 「鎌倉幕府と奥羽両国」, 小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』, 東京大学出版会, 41-82.
- 岩本由輝 (1994) : 『東北開発120年』, 刀水書房, 199.
- 内田寛一 (1933) : 『郷土地理研究』, 雄山閣, 286.
- 遠藤巖 (1976) : 「中世国家の東夷成敗権について」, 『松前藩と松前』9, 1-23.
- 遠藤巖 (1992) : 「『北の押さえ』の系譜」, 荒野泰典他編『アジアのなかの日本史・外交と戦争』, 東京大学出版会, 277-296.
- 大石直正 (1978) : 「中世の黎明」, 小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』, 東京大学出版会, 1-40.
- 大石直正 (1986) : 「奥羽の荘園公領についての一考察」, 高橋富雄編『東北古代史の研究』, 吉川弘文館, 1-40.
- 角田・矢津・小平 (1911) : 『大日本地理集成 全』, 隆文館, 1034.
- 菅野成寛 (1995) : 「藤原秀衡・泰衡期における陸奥国衙と惣社」, 『岩手史学研究』, 78, 1-33.
- 菅野文夫 (1992) : 「平泉の『幕府』」, 『月刊歴史手帖』名著出版, 20-10, 4-8.
- 熊田亮介 (1989) : 「古代における『北方』について」, 木本好信編, 『古代の東北—歴史と民俗—』, 高科書店, 37-59.
- 中川浩一 (1978) : 『近代地理教育の源流』, 古今書院, 360.
- 西田与四郎 (1932) : 『師範教育 内外地理通説』, 中文社, 241.
- 高橋崇 (1986) : 『蝦夷 古代東北人の歴史』, 中央公論社, 237.
- 高橋富雄 (1982) : 「東北」, 河北新報社編, 『宮城県百科事典』, 743.
- 田山花袋 (1911) : 『新撰名勝地誌 東山道東北部』, 博文館, 634.
- 田山花袋 (1981) : 『東京の三十年』, 岩波書店, 334. (『花袋全集』11巻, 1923を底本としたもの).
- 米地文夫 (1994) : 「地理教育の場への自然地域名『奥羽山脈』の定着過程—地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(3)—」, 『岩手大学教育学部研究年報』, 53, 119-138.
- 米地文夫・今泉芳邦 (1994) : 「地名「三陸地方」の起源に関する地理学的ならびに社会学的問題—地名「三陸」をめぐる社会科教育論(第1報)—」, 『岩手大学教育学部研究年報』, 53, 131-144.
- 米地文夫 (1995) : 「戊辰戦争時~明治初年における地名「東北」—史料および明治前期地歴教科書の分析—」, 『季刊地理学』(投稿予定).
- 米地文夫ほか (1995a) : 「近代国家形成過程における地名『東北』—明治中~後期の用例とその社会科教育との関係—」, 『岩手大学教育学部研究年報』(投稿予定).
- 米地文夫ほか (1995b) : 「開発・振興の時代の地名『東北』—明治30年代~昭和前期の用例と郷土教育との関わり—」, 『東北開発研究所年報』(投稿予定).
- (なお, 文中, 史料の引用に際しては, 漢文体のものはこれを書き下した。古典, 文学作品, 辞書, 教科書などは概ね省略した。)